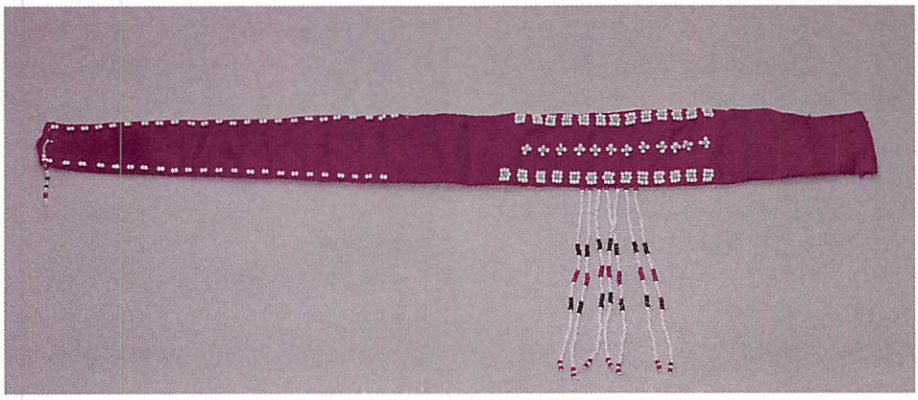
ISSN 0917－4729

北方民族博物館だより

No.90



HA182　女性用ヘッドバンド　イヌイト（エスキモー）　デンマーク領グリーンランド　49.8cm

グリーンランドの女性には伝統的に、長い髪を後頭部の上方で結い上げる習慣があった。ヘッドバンドは、結い上げてできた髷（まげ）を束ねるための道具である。本資料では、色鮮やかな赤い布製の帯にガラスのビーズの縫い付け模様とぶら下げ飾りがほどこされているが、かつては帯にアザラシ皮、ビーズにカペリン（カラフトシシャモ）などの魚の骨が用いられた。

目次　Contents

1　表紙　女性用ヘッドバンド
2－3　第28回特別展「極北の島グリーンランド　氷海のハンター、エスキモー」
4　講演会「グリーンランドがたどった4500年の歴史と「今」」
／講座「自治と気候変動　極北の島グリーンランドの現在」
5　ロビー展「北海道写真館紀行①　オホーツク編」／ロビー展「ウイルタ刺繍「フレップ会」作品展」
6　INFORMATION

北海道立北方民族博物館
Hokkaido Museum of Northern Peoples

第28回特別展

極北の島グリーンランド

氷海のハンター、エスキモー

2013.7.13-10.14

グリーンランドは、北は北極海、東はグリーンランド海と大西洋に面した、世界最大の島です。日本の国土の約6倍に当たる総面積およそ217万㎢の大半（およそ6分の5）は北極圏に含まれ、内陸部は、厚さが最大3,000mを超える氷床で覆われています。人びとは氷床の端で地面が現れている海岸地域で、北の海の資源を巧みに利用して生活を営んできました。

本展では、国立民族学博物館が所蔵する92点の資料を含む130点の民族・考古資料、および写真や映像などにより、グリーンランドの文化や歴史を紹介しました。

グリーンランドの自然と生き物

グリーンランド近海には、5種類のアザラシ、セイウチ、大型鯨類、シロイルカ、イッカク、ホッキョクグマなどの海生ほ乳類や、サメ類、タラ類、オヒョウ、ホッキョクイワナ、サケ類など魚類が生息しています。グリーンランドの人びとの暮らしは、こうした海の生物資源の豊かさに支えられています。

本特別展では、長さ約2mのイッカクの牙（実物）を展示しました。イッカクは通称で「一角鯨」とも呼ばれるクジラの仲間ですが、上あご左側の切歯（牙）が「角」のように前に突き出ているのが特徴です。イッカクの牙はかつてヨーロッパで解毒の効果があると信じられ珍重され、日本にも江戸時代には薬としてもたらされていました。

エスキモー文化の東端の地

「エスキモー」は、シベリア北東部、アラスカ西部、カナダ北部、グリーンランドを含む北アメリカ極北地帯に住む特定の先住民族の総称として、長く用いられてきた用語です。カナダのエスキモーの自称にならって「イヌイト」と呼ぶこともありますが、本展では、シベリアからグリーンランドまで拡がる歴史的・文化的な共通性を重視して「エスキモー」という名称を用いました。エスキモー文化の拡がりを見ると、グリーンランドはその東端にあります。

氷海の狩猟

地球の北方地域のなかで、エスキモーは最も高度な寒冷地適応をした人びととして知られています。その文化の基礎にあるのが、北の海の資源を獲得する狩猟の技術と、それを利用する知恵です。特に、内陸部を覆う氷床によって陸の資源が限られているグリーンランドでの生活は、アザラシ猟をはじめとする海の狩猟に大きく依存していました。

エスキモー文化に広く共通して用いられてきた狩猟道具の一つに、カヤックがあります。カヤックは皮舟の一種で、夏に氷が解けた海に乗り出してアザラシ類やクジラ類を獲るためになくてはならない道具です。グリーンランドのカヤックは全体に細身で、デッキの上面が平らになっています。デッキの上面には、海上猟に必要な銛や浮き袋などの道具が積載され、ひもでしっかりと固定されました。

本展では、復元カヤック（当館蔵）に乗っていただけるコーナーを設けました。Visit Greenland（グリーンランド政府観光局）提供による氷海の写真をバックにした本コーナーは、来場者アンケートでもご好評をいただきました。

展示解説会のようす

展示風景（復元カヤック）

グリーンランドのイヌぞりと植村直己

イヌぞりは、狩猟や漁撈に出かけるときや獲物を持ち帰るときなどに用いられます。そりを引くイヌは、エスキモーの人たちにとって財産でした。

本展では、冒険家として知られる植村直己氏（1941～1984）が1974～1976年にグリーンランド・アラスカ間12,000㎞横断に使用したイヌぞり（国立民族学博物館蔵）を紹介しました。植村氏は、北部グリーンランド・シオラパルクに住むエスキモーの人びとから極地生活の技術を学び、グリーンランド式のイヌぞりに乗って、北極圏で数々の冒険を行いました。

伝統的な食事

グリーンランドの伝統的な食事は、アザラシやクジラなど海の動物の肉が中心でした。鳥や魚など獲れる季節の決まっている食料資源は、干したり、発酵させたりして長期保存しました。

今日でも祝い事のときに食される伝統料理に、キビアクがあります。キビアクは、ヒメウミスズメという海鳥を数百羽、アザラシの生皮の中にかたく詰め込み、数ヶ月間発酵させて作ります。食べるときは、アザラシ皮から取り出して、羽毛のついた皮を引き裂いて取り除きながら中の肉を食します。本展でキビアクを紹介した写真や映像には、多くの来場者が足をとめて見入っておられました。

キビアク（2007年シオラパルク、スチュアート ヘンリ氏撮影・提供）

伝統的な衣服

伝統的な衣服は、フード付きの上着（パーカ）、ズボン、ブーツを基本としました。ほとんどはアザラシ皮で作られましたが、カリブー（トナカイ）、ホッキョクグマ、イヌ、鳥の皮などの使用も見られます。装飾や装身具には、ビーズや皮の縫い付け飾りが用いられてきました。ビーズは、かつて石や動物の骨、歯などで作られましたが、ヨーロッパからの流通量が多くなるにしたがって、ガラス製ビーズが多量に用いられるようになりました。

今日のグリーンランドで民族衣装とされる女性用衣服では、アザラシ皮製のズボンやブーツ、皮のモザイク模様などグリーンランドのエスキモー文化に伝わる様式と、ガラスビーズを編んだ大きなケープや花柄の刺繍などのヨーロッパ的な様式とが融合しています。

狩猟用男性用衣服（左）と祝祭用女性用衣服（民族衣装）（右）（いずれも当館蔵）

デンマークの植民と現代のグリーンランド

グリーンランドのエスキモー文化とヨーロッパ文化との融合の背景には、18世紀に始まるデンマーク人による植民の歴史があります。1721年、当時のデンマーク・ノルウェー連合王国から、キリスト教宣教師ハンス・エゲデがグリーンランドへ派遣されました。エゲデは、先住民エスキモーに対する宣教を行い、デンマーク人によるグリーンランド植民の礎を築きました。1774年、王立グリーンランド交易所が設置されると、アザラシの油や毛皮、鯨油がヨーロッパへ持ち出されるようになります。グリーンランドには、ヨーロッパから銃、コーヒー、砂糖などが持ち込まれ、エスキモーの生活に普及しました。

20世紀に入るとグリーンランドは徐々に自治の力を強め、1979年、デンマークの「自治領」となりました。現在では、内政に関する事柄はすべて首都ヌークにあるグリーンランド自治政府で決定しています。

今日のグリーンランドと観光

デンマークが商業的漁業を推進してきたため、今日までにグリーンランドの人びとの生活を支える手段は、狩猟から漁業に転換していきました。現在、グリーンランドの産業は漁業と水産物の加工業が中心になっています。

近年では、南西部で牧羊業や農業も行われています。また、地球温暖化で変容する自然を目的にグリーンランドを訪れる観光客が増え、観光業も高まりを見せています。

＊＊＊

なお、本特別展では小中学生対象の関連事業として、7月20日（土）にはくぶつかんクラブ「グリーンランドのおもちゃとよみきかせ」（講師：山田祥子学芸員、声の図書館そよかぜ）、7月28日（土）に「グリーンランドのいぬぞり模型づくり」（講師：中田篤主任学芸員）を開催しました。また、8月4日（日）には大人・子ども対象の催しとしてアニメ上映会「白くまになりたかった子ども」を開催しました。

本特別展の開催にあたっては、デンマーク大使館より後援をいただきました。また、国立民族学博物館、Visit Greenland（グリーンランド政府観光局）、スチュアート ヘンリ氏、髙橋美野梨氏、林直孝氏、岸上伸啓氏、齋藤玲子氏より協力をいただきました。

（学芸グループ　山田　祥子）

講演会

グリーンランドがたどった

4500年の歴史と「今」

2013.7.13
講師　スチュアート　ヘンリ（本多　俊和）氏
（放送大学客員教授）

イヌイト（エスキモー）など北方民族の研究に長くたずさわってこられたスチュアート　ヘンリ氏より、グリーンランドの歴史について講演をいただきました。専門的な解説の合い間に、ご自身が近年の現地調査で撮影した写真の紹介をまじえ、楽しくわかりやすくお話しくださいました。

グリーンランドの歴史は、北東アジア方面から来たいくつかの集団の入れ替わりとヨーロッパからの入植が関連して、複雑に入り組んでいます。最も古い先史文化は、今から約4600～3000年前に北部グリーンランドで展開したインデペンデンス文化、および南部に展開したサッカック文化といわれています。その後、約3000～800年前にプレ・ドーセット文化とドーセット文化、約800年前からはチューレ文化が展開しました。このチューレ文化を担う人びとが、現代グリーンランドのイヌイトにつながる遺伝的、文化的祖先であると考えられています。その後、18世紀には西部地域からデンマーク人の植民が始まりました。

ここでは「イヌイト」と言っていますが、「イヌイト」も「エスキモー」も、最近のグリーンランドではあまり一般的な呼び方ではありません。現在、グリーンランドの住民を指す政府の公式名称は「カラーリト」です。この名称にはデンマーク人とイヌイトが「混じった」意味合いがあるそうです。グリーンランドの西部ではデンマーク人とイヌイトの両方の血をもつ人が多く、誰をデンマーク人、誰をイヌイトと明確に分けることが難しくなっています。その傾向は、植民の歴史が長く、人口の集中する西部地域で特に顕著です。

スチュアート氏は、気候変動や資源開発、自治などの新しい動きの見られる今日のグリーンランド社会に注目し、現地調査に行っておられます。内陸が氷で覆われたグリーンランドでは舗装された道路がわずかで、町と町の間を移動するには飛行機やヘリコプターをつかうそうです。移動時に空撮した町の全景や飛行場のようすなど、現地の「今」がわかる写真や経験談にも、来場者の関心が集まりました。

講堂でのお話の後、特別展会場で解説するスチュアート氏

（学芸グループ　山田　祥子）

講座

自治と気候変動

―極北の島グリーンランドの現在

2013.7.28
講師　髙橋　美野梨　氏
（日本学術振興会特別研究員）

講壇に立つ髙橋氏

デンマークのコペンハーゲン大学、グリーンランド大学に留学経験があり、グリーンランド、デンマークを中心とした国際関係学、北欧地域研究を専門とする髙橋美野梨氏を講師に迎え、特別展の関連講座を開催しました。

最初にグリーンランドの政治や経済、人びとの生活をご紹介いただきました。日本の約6倍の面積を持つ世界最大の島グリーンランドの人口は56,000人余りで、その約9割をイヌイトが占めること、現在デンマークの自治領でデンマークから莫大な経済支援を受けていること、主幹産業は水産業で日本にもアマエビなどが輸出されていることなどをお話しいただきました。

次にグリーンランドの自治について説明いただきました。1721年の植民地化、1953年の統合以降、グリーンランドでは法制度などのデンマーク化が進められてきました。1970年代に始まった自治権獲得運動を通じて次第に自治の幅を広げ、2009年には独立権を含む高度な自治権を獲得しましたが、デンマーク国家の一部であり続けることを選択し、現在に至っているとのことです。

最後に、気候変動がグリーンランドに及ぼす影響についてお話しいただきました。気候変動に伴う氷床や海氷の減少は、グリーンランドとその周辺における地下資源開発を容易にすると考えられます。莫大な埋蔵量を持つ油田を始めとした地下資源開発の活性化は、グリーンランドの経済的自立を現実的なものにする可能性を秘めています。そのため、これまでデンマークの一部であり続けることを選択してきたグリーンランドの今後の自治の方向性が注目されています。

「自治」というやや難しい内容でしたが、写真や地図を活用しながら丁寧にご説明いただき、参加者のグリーンランドに対する理解も深まった様子でした。

（学芸グループ　中田　篤）

ロビー展

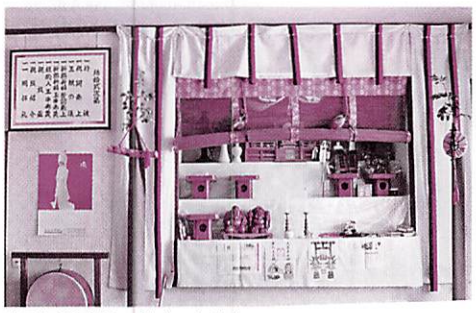
オホーツクシリーズ2
北海道写真館紀行① オホーツク編
～写真館が残した、数知れぬ北海道を求めて～

2013.6.8-6.23

北方民族博物館では昨年から、北海道・オホーツク海沿岸地域に根ざした活動を紹介する「オホーツクシリーズ」と称する連続展示を始めました。この第二弾として「オホーツク地域の写真館」をテーマに選びました。

写真館は私たちのそばにあって、人生の節目や地域の喜怒哀楽をみつめてきた存在です。オホーツク地域の写真館は、古い歴史をもち、またその技術の高さは全国的にも知られています。

オホーツク地方で最も古い写真館は、網走に吉田登一氏が、明治31年または32年に始めた「春陽館」だったようです。オホーツク管内の写真館の集まりが、全北見写真館協会です。技能の向上と親睦を図ることを目的に組織され、精力的に活動をしています。本ロビー展の開催にあたっても、全北見写真館協会の全面的な協力を受けました。記して感謝いたします。



北見市留辺蘂町　秋山スタジオ
オホーツク地方では10年ほど前まで写真館がもつ
祭壇の前で結婚式をあげる例が多く見られました。

6月8日には、北海道の写真館事情にお詳しい、写真家の露口啓二氏とライターの谷口雅春氏の座談会「北海道の写真館」を開催しました。

左：露口氏　右：谷口氏

(学芸グループ　笹倉　いる美)

ロビー展

オホーツクシリーズ3
ウイルタ刺繍「フレップ会」作品展

2013.6.8-6.23

作品展会場

「オホーツクシリーズ」の第三弾として、網走市にあるウイルタ刺繍サークル「フレップ会」の作品を紹介する展示を行いました。

ウイルタはサハリンの少数民族です。ウイルタ語を話し、狩猟・漁労・トナカイ飼育をおこなって生活していました。そして、靴や衣服の襟や裾、鞄などに、渦巻きやハート型をおもわせる曲線模様を刺繍していました。

フレップ会は、網走市教育委員会が主催するウイルタ刺繍講座の参加者によって、昭和59（1984）年に発足したサークルです。会員の皆さんは、サハリン（樺太）出身の北川アイ子さんの指導のもと、長年にわたりウイルタ刺繍を楽しみながら、技術を伝えてきました。

ちなみにフレップとは樺太で、ベリー類をさした言葉です。

6月9日には、フレップ会の皆さんを講師に、ウイルタ刺繍講習会も開催しました。

フェルトにあらかじめつけておいたウイルタ文様の上を鎖目を主体としたステッチで刺繍してゆきます。

(学芸グループ　笹倉　いる美)

第28回北方民族文化シンポジウム 網走

環境変化と先住民の生業文化
－家畜飼育・牧畜における適応－

環境変化が北方先住民の牧畜に及ぼす影響を取り上げます。

■日程：平成25年10月5日（土）・6日（日）
各9:00～16:00

■会場：オホーツク・文化交流センター
（エコーセンター2000）

■内容　国内外の専門家8名による研究発表（同時通訳付き）

関連事業

◇上映会
「星野道夫 Alaska 星のような物語　希望編」

■日程：平成25年10月2日（水）　18:30～19:30

■会場：オホーツク・文化交流センター（エコーセンター2000）　エコーホール

移動展

カナダ・極北　イヌイトの壁掛け展

平成25年9月21日（土）～10月14日（月）
［休館日　9月24、30日、10月7日］

帯広百年記念館　特別展示室　【入場無料】
（帯広市緑ケ丘２丁目　TEL 0155-24-5352）

イヌイトの壁掛け77点とお人形等30点を展示しています。

主催：帯広百年記念館、北海道立北方民族博物館

INFORMATION

行事報告

◆6月15日（土）、はくぶつかんクラブ「北方民族のワナづくり」（講師：渡部裕学芸員）を開催しました。

◆6月29日（土）、講習会「北西海岸インディアンのボタンローブ」（講師：岡田淳子館長）を開催しました。

◆6月30日（日）、「ユハンヌス～夏至祭り」を開催しました。シカ肉ソーセージドッグづくり体験、モルック大会、ミニコンサート（網走吹奏楽団、ファンキーブラザーズ）、フラダンス、日本舞踊をお楽しみいただきました。また、ポートアルバーニ・ファンクラブによるポートアルバーニカフェも同時開催されました。

モルック大会のようす

◆8月3日（土）、はくぶつかんクラブ「トーテムポールのペンスタンド」（講師：永瀬早苗解説員）を開催しました。

◆8月10日（土）、はくぶつかんクラブ「かわでつくるミニバッグ」（講師：濱名亜璃紗解説員）を開催しました。

◆8月17日（土）、講習会「北方民族博物館でジャムづくり」（講師：中田篤学芸員）を開催しました。当館の庭でできたカリンズとハスカップをつかって、ジャムを作りました。

◆8月28日（水）、ミュージアムライティングコンサート（網走商工会議所・北海道立北方民族博物館共催）を開催しました。吉田瑳矩果さんによるハープ演奏、高畠正明さんによるオカリナ演奏を鑑賞いただきました。

お知らせ

◆8月29日（水）、当館研究協力員・小谷凱宣氏に紺綬褒章が授与されました。平成24年に北方民族に関する図書等4248冊を当館へご寄贈くださったことが今回の授章につながりました。小谷氏の旧蔵図書の一覧は、『北海道立北方民族博物館資料目録8：小谷文庫目録』で公開しています。

北方民族博物館だより
No. 90

平成25（2013）年９月27日発行
編集・発行　北海道立北方民族博物館
〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1
Tel 0152-45-3888　Fax 0152-45-3889
e-mail：tonakai@hoppohm.org
http：//hoppohm.org
指定管理者
一般財団法人北方文化振興協会